

論文内容要旨（和文）

平成 22年度入学 理工学研究科 博士後期課程

専攻名 ものづくり技術経営学

氏 名 久保田修介



論文題目：グローバル社会における「ものづくり」と「ひとづくり」の一つの方向性

論文を以下の内容で構成している。

第1章 本論文の背景と目的

第2章 「ものづくり」に関する先行研究

第1節 「ものづくり」に関する日本の国家方針

第2節 グローバル市場を見据えた「ものづくり」

*（要旨）戦後、日本の成長を支えてきた日本型経営システム、あるいは高品質で効率化を重視した日本型生産システムという「ものづくり」のシステムが変わろうとしている。

第3章 「生活必需品」と「生活娯楽用品」における「ものづくり」の違い

第1節 「生活必需品」としての「靴づくり」

第2節 「生活娯楽用品」としての「玩具づくり」

*（要旨）日本製の靴をグローバル化させるには、各民族の人種的特長を把握した上での靴づくりが求められる。一方、玩具の「ものづくり」は極論すれば「ドラマづくり」という付加価値の高い内容を作れるか否かで勝敗が決まってくる。

第4章 グローバル社会における「ものづくり」の方向性

第1節 「文化」の定義

第2節 「リカちゃん」のグローバル化は難しい

第3節 「玩具づくり」の事例：男児玩具「ミクロマン」

第4節 「ミクロマン」「ダイアクリン」から「トランスフォーマー」へ

第5節 グローバル社会における「ものづくり」の一つの方向性の示唆

*（要旨）玩具の場合は、民族文化的観点からの「ものづくり」が最重要になる。

第5章 「ひとづくり」に関する先行研究

第1節 古代ギリシャ時代と日本の「ひとづくり」の歴史

第2節 日本の教育：「ユダヤ式天才教育の秘密」から

第3節 日本の大学教育

第4節 「教育改革」への取り組み事例

第5節 「心は脳である」～科学と価値観の優先順位～

第6節 「潜在能力（Capability）」

第7節 『道は開ける』と『成功哲学』

第8節 「ひとづくり」の先行研究における諸課題

*（要旨）先行研究は全て納得するが、成功事例に基づく具体策がないことが課題であろう。

第6章 韓国における「グローバル人材」育成の姿

第1節 「グローバル人材」

第2節 韓国における「グローバル人材」の育成

*（要旨）日本の学生は「単位取得至上主義」であるが、韓国では英語での①問題発見解決能力、②創造能力、③チームワーク能力、④コミュニケーション能力を体得することを指向している。

第7章 「生き方」「学び方」「働き方」の明確化

- 第1節 「生き方」としての「マトリックス思考フレーム」
- 第2節 公務員の「働き方」としての「業務理念検討表」
- 第3節 企業人の「働き方」としての「業務理念検討表」
- 第4節 「学び方」としての「抽象文言具体化シート」
- 第5節 「経営学」と「システム工学」の理論の活用

* (要旨) 「なぜ生きるのか - どう生きるのか」「なぜ学ぶのか - どう学ぶのか」「なぜ働くのか - どう働くのか」という誰でも知っているような課題に、明快な解答を示すことを試みている。

第8章 公務員の「ひとづくり」に関する社会実験と検証例

- 第1節 公務員の「ひとづくり」
- 第2節 公務員の「生き方」
- 第3節 公務員の「働き方」
- 第4節 研修総括

* (要旨) 全職員が受講したことが「共通言語」「共通手法」で学び「共通認識」が図れ、「共有知」が形成されたため、コミュニケーションが容易に図れ、相互研鑽のしやすい組織体に変化している。

第9章 企業人の「ひとづくり」に関する社会実験と検証例

- 第1節 企業人の「ひとづくり」
- 第2節 企業人の「生き方」
- 第3節 企業人の「働き方」
- 第4節 研修総括

* (要旨) 社員は真剣に学びとろうとする前向きな姿勢は見えるが、「ひとづくり」の根幹となる人材育成システムの不十分さが浮かび上がっている。

第10章 学生の「ひとづくり」に関する社会実験と検証例

- 第1節 学生の「ひとづくり」
- 第2節 アンケート分析

* (要旨) 自分は何をどうすればいいのか、自分は何をすると満足するのか、将来どういう職業に就くのが望ましいのか等々に対する明快な答えが見つからないという悩みが浮かび上がる。

第11章 データマイニング (Data Mining)

- 第1節 回帰分析のための関係数字の抽出
- 第2節 回帰分析による産学官の人々の分析事例
- 第3章 回帰分析作業からの仮説検証

* (要旨) 「生き方」が明確な人は「働き方」もしっかりとしており、手抜かりなく仕事を進める人であることが定量的に示せた。これを裏付ける論拠は「生き方」が明確な人が記述している「働き方」には、「生き方」と同様に深い洞察力を持って、明確な行動計画が示されていることから判断できる

第12章 結章

- 第1節 「ものづくり」の方向性
- 第2節 「ひとづくり」の方向性
- 第3節 グローバル社会で活躍する人材育成についての私見

* (要旨) 「ものづくり」に関しては、品質や価格という“ハードウェア”に、感動、興奮という“ソフトウェア”を加味するイノベーション（革新）への取り組みが不足していると考察している。

「ひとづくり」に関しては、学生本人が進んで英語を使う外国に出かける仕組みを大学側が作り、その国での体験を通して、相手国の文化や宗教、価値観や風俗習慣などを肌で感じさせることが「グローバル人材」の第一歩と捉えている。

学位論文の審査及び最終試験の結果の要旨

平成 25 年 2 月 7 日

理 工 学 研 究 科 長 殿

課程博士論文審査委員会

主査 高 橋 幸 司

副査 児 玉 直 樹

副査 志 村 勉



学位論文の審査及び最終試験の結果を下記のとおり報告します。

記

1. 論文申請者

専攻名 ものづくり技術経営学
氏 名 久保田 修 介

2. 論文題目（外国语の場合は、その和訳を併記する。）

グローバル社会における「ものづくり」と「ひとつづくり」の一つの方向性

3. 審査年月日

論文審査 平成 25 年 2 月 1 日 平成 25 年 2 月 7 日
論文公聴会 平成 25 年 2 月 7 日
場所 山形大学国際事業化研究センター 泰ホール
最終試験 平成 25 年 2 月 7 日

4. 学位論文の審査及び最終試験の結果（「合格」・「不合格」で記入する。）

(1) 学位論文審査 合 格
(2) 最終試験 合 格

5. 学位論文の審査結果の要旨（1,200 字程度）

別紙のとおり

6. 最終試験の結果の要旨

別紙のとおり

別 紙

専攻名	ものづくり技術経営学	氏名	久保田 修介
学位論文の審査結果の要旨			

「ものづくり」と「ひとづくり」は永遠の課題であり、そして特にグローバル社会を迎える現代においては極めて難解な問題である。本論文ではこれらを技術経営学の観点から理論を構築し、学生並びに社会人を対象にして検証を行い、ものづくり並びにひとづくりに極めて高い効果を与えることを実証した。

第1章は「序論」であり、本論文をまとめるに至った背景とその目的を明確にした。

第2章は「「ひとづくり」に関する先行研究」であり、既往の研究を総括し、本研究の立場を明らかにした。

第3章は「学生の「生き方」「学び方」の明確化」であり、「マトリックス思考フレーム」に基づいて高校生と大学生に講義を行い、その結果を分析し、グローバル人材に必要な要素を明らかにした。

第4章は「公務員の「生き方」「働き方」の明確化」であり、「マトリックス思考フレーム」に基づいて公務員に講義をし、公務員の働き方明らかにし、公務員に対しても本理論が適用可能である事を提示した。

第5章は「企業人の「生き方」「働き方」の明確化」であり、「マトリックス思考フレーム」に基づいて企業人に講義をし、企業人の働き方明らかにし、企業人に対しても本理論が適用可能である事を提示した。

第6章は「データマイニング」であり、データを整理するにあたり、考慮すべきパラメータを明らかにした。

第7章は「「ものづくり」に関する先行研究」であり、既往の研究を総括し、本研究の立場を明らかにした。

第8章は「「生活必需品」と「生活娯楽用品」における「ものづくり」の違い」であり、靴と玩具をそれぞれの例に取り、ものづくりに取り組む違いを明らかにした。

第9章は「グローバル社会における「ものづくり」の方向性」であり、玩具をグローバル化するための要件を明らかにした。

第10章は「結章」であり、本論文をまとめた。

これらの研究成果は、2報の論文として専門学術誌に掲載されている。本論文で提案された理論に基づき学生の生活並びに勉学に対する態度、会社経営者の経営改善さらには公務員の意識改革において成果を上げている。

以上の結果より本論文は博士論文として十分なものと認め、合格と判定した。

最終試験の結果の要旨

本学の規定に従い、本論文および関連分野に関して口頭発表40分並びに質疑応答30分の最終試験を行った。その結果、学位論文の内容ならびに関連分野に関する知識・理解度は十分すぎる程であり、博士として必要とされる専門知識並びに研究能力を十二分に備えているものと判断し、合格とした。